

氏 名 (本籍)	^{おお} 大 ^{くわ} 桑 ^{ひとし} 齊 (石川県)
学 位 の 種 類	文学博士
学 位 記 番 号	乙第29号
学位授与の日付	平成4年4月7日
学位授与の要件	学位規定第3条第2項
学 位 論 文 題 目	(主 論 文) 近世初期民衆思想史研究 (参考論文) 日本近世の思想と仏教
論 文 調 査 委 員	(主査) 教 授 黒 田 俊 雄 (副査) 教 授 渡 辺 貞 麿 (副査) 文学博士 鍵 主 良 敬 (副査) 文学博士 柏 原 祐 泉 講 師

学位請求論文審査要旨

〔論文内容の要約〕

提出された学位請求論文は、主論文『近世初期民衆思想史研究』と参考論文『日本近世の思想と仏教』から成る。主論文は、活字書き約200頁(400字詰用紙換算約400枚)を用い、序説、本論(4章)、結章から構成されている。

まず序説「近世民衆思想史の視点と課題」は「1. 視点としての〈自律〉」「2. 統一政権と〈自律〉と仏教」「3. 思想史的展望」「4. 民衆思想史料としての仮名草子」の4項から成り、本論執筆の視点や意図を述べる。すなわち、民衆思想史における〈自律〉は近世初頭に民衆レベルで獲得されたが、それは過酷な中世的救済からの解放であるとともに、他律的権威を否定も超越もせず、逆にそれを自己の内に取り込み、内在化し、自己自身を律してゆくことで主体性を確立しようとする思想であり、それは権力によりからめとられてゆくことでもあったとみる。民衆はこの〈自律〉を、統一政権によって壊滅させられた仏教「教団」からではなく、自からの思惟で為し、仏教を再解釈し自からの仏教を形成していった。また、近世的〈自律〉の特色の一

は、万物の「原理」であると共に人間の心に内在する「心神」を確立したことであるとする。以上の民衆思想の形成を、関係史料の乏しい時期に、従来、国文学で、中世お伽草子から近世浮世草子の過渡期的作品と扱ってきた仮名草子を対象に考察し、その、人間の〈まこと〉をよく示すとみられる恋を主題とする作品から、具体的に検討してゆくとしている。

本論第一章「因果法則の矛盾と心の主体性—『心学五倫書』の悪人富貴・善人貧苦と天心一体説—」は、「1. 研究史と課題」「2. 悪人富貴・善人貧苦と積善余慶」「3. 天心一体説と修身齐家治国」「4. 三教観」「5. 現実批判」「6. 思想史的意義」の6項から成る。本章では、慶長5年～元和5年頃の著とされる著者不明の『心学五倫書』（『五倫書』）を対象とし、本書から同時期の思想的課題を抽出しようとする。まず『五倫書』（全20段）が第一段で、天道の自然や人間への主宰の支配を説き、人の心を天道の分岐とする天心一体説をとることに注目し、ここに「心の主体性」思想が成立し、近世的〈自律〉の思想があるとする。ついで、本書では、以下の諸段で道徳的徳目を説明して天心一体説の「修身」を明し、それがイエの永続を願う「齐家」から、さらに天の本心の慈悲を实践課題とすることで、「治国」「平天下」にまで貫徹されると説くという。とくに、自己の「修身」による善因が、子孫に「齐家」の善果を齎すという未来志向の積善余慶的因果応報説をとり、「修身」に基づく死後の帰天を説くことは、本書が一方で神儒一致説をとって仏教を排しながら、基本的には仏教の枠組の中にあると指摘する。そして最後に、本書が近世的〈自律〉思想への最初の営為であると、位置づけている。

第二章「仏教の人間化と煩惱即菩提—仮名草子における恋・因果・無常・煩惱・菩提—」は4節から成り、第一節「『恨の介』の恋と因果と往生」は、「1. 研究史と〈仏教の人間化〉の視点」「2. 因果の内の〈自覚〉と妄執としての恋」「3. 〈因果の恋〉と〈人間の恨み〉」「4. 「後生にて」から〈恨みの往生〉へ」の4項から構成される。慶長17年頃成立の本書の物語は、主人公葛の恨の介が清水観音万灯会で身分の違う近衛殿の養女雪の前と出会い恋をし、「及ばぬ恋」を因果の法則の貫徹として成就させることを観音に強迫し、一度は逢瀬を得るが、別れ際の雪の前の、再会は「後生にて」の語で、恨の介は恋の成就のため死に、雪の前も嘆いて後を追うというものである。ここでは、恋を妄執と自覚しつつ、恋の成就が妄執からの脱却とする主人公

の矛盾的な生と死を描くことで、後の寛永期の仮名草子が主題とする煩惱と菩提の課題の先駆を見出すという。恨の介の恋の成就のための死は、因果法則に抵抗する因果の人間の捉え返し、すなわち〈仏教の人間化〉であり、二人の死は破局でなく恋の成就としての菩提への道で、往生を遂げたものであった。すなわち、妄執である恋が往生の善因となったのは、観音が人間の側に立って成就させたからで、煩惱の恋を観音に菩提への道と認めさせ、煩惱を断じて菩提へ向うのではなく、煩惱に徹することが菩提への道であり、神仏の意に叶うものとされたと考察する。

第二章第二節『薄雪物語』の恋と無常」は、「1. 課題と研究状況」「2. 無常と仏法と恋」「3. 因果と後世と観音」の3項から成る。『恨の介』よりやや遅れて成立した本書の物語は、主人公園部の衛門が清水寺のほとりで人妻薄雪を見初め、十数通の手紙を送って逢瀬を重ねるが、薄雪は病死し、出家した衛門もやがて往生を遂げたというものである。本書では無常観を基本的観点とし、〈現世＝無常〉の仏教の原理の内て恋を成就させ、人間の〈自律〉を仏法から語ろうとし、そこに〈仏教の人間化〉を見るという。そして、現世で恋を成就することで後世への因果を断切り、後世の苦を逃れて、新しい因果法則を切開いて因果からの〈自律〉をしようとするという。ここでは後世は〈自律〉を遂げた世として現世の延長であり、人間が無常や煩惱(恋)や後世の問題に立向い、究極的には因果や後世が意味を失い、終には現世も無常として否定されることとなり、虚無の影が忍びより、こうして〈仏教の人間化〉は虚無主義を引出したと述べている。

第三節『露殿物語』の恋と菩提」は「1. 研究状況と課題」「2. 煩惱と菩提」「3. 板挟みの出家」「4. 柳は緑花は紅」の4項から成る。寛永初年の成立といわれる本書の物語は、主人公露殿が道心堅固を志し菩提を求め、浅草観音から「煩惱即菩提」との夢告を得るが、帰途吉原の遊女東の君を見初め、その後露殿は京へ上り遊女吉野太夫とも契りを重ね、やがて上京の東の君との板挟みで、先の「煩惱即菩提」はこれかと悟り、出家するというものである。本書では『恨の介』や『薄雪物語』にまだ明確な課題となっていない「煩惱即菩提」を取上げるが、結局露殿は「煩惱即菩提」の真意を悟りえず、そこで作者は〈仏・仏法・傾城＝菩提〉に対し〈衆生・世法＝煩惱〉の対概念により、両者はそのまま「柳は緑花は紅」であるが、露殿は「煩惱即菩提」の内にあってそれを悟らず、出家して〈煩惱一断一菩提〉の道をとるの

で、「あはれなりし」と笑おうとするという。ここでは、寛永期に「思ふ事叶わぬ」現実が確かとなり、人々はこれを因果と認め乍ら、その内で〈自律〉を求めるよりは、〈現実＝浮世〉と虚構化し、〈浮世＝煩惱〉を〈煩惱＝菩提〉と二重に虚構化したことが示されているとする。こうして民衆は仏教に〈虚構化＝正当化〉の役割を担わせて近世に再生させたが、しかしそのままでは虚無主義から更に享楽主義へ陥るので、やがて仏教は本来主義の回復を試みると論じている。

第四節『七人比丘尼』の煩惱即菩提」は、「1. 成立の課題」「2. 通俗的「煩惱即菩提」観」「3. 「煩惱即菩提」観の展開」「4. 心外無別法の「煩惱即菩提」」「5. 「煩惱即菩提」論の根底」の5項から成る。寛永12年刊行の本書の物語は、信濃国関川宿で老比丘尼が営む湯接待の宿での7人の比丘尼の懺悔物語の形をとる。最初は煩惱を断って菩提を求める〈煩惱＝断＝菩提〉という通俗的な「煩惱即菩提」の話が続き、ついで〈煩惱＝断＝菩提〉から万法一如にたてば煩惱と菩提は不二であるとする〈煩惱＝即＝菩提〉へと話の内容が進み、最後に「心外無別法」の立場でこそ「煩惱即菩提」であるとされ、煩惱と菩提は本来「空」に於て一如であると示される。ここに、慶長以来の民衆が苦闘してきた思想課題の一の帰結があり、先述の『露殿物語』の二重の虚構化に対し、仏教本来の立場から「煩惱即菩提」を説明して、仏教原理から〈心の主体性〉を回復し、〈仏教の人間化〉に対する〈人間の仏教的再把握〉の試みが現れているとしている。

第三章「人間の仏教的再把握—鈴木正三の唯心弥陀と世法即仏法—」は3節から成り、第一節『因果物語』の業報転鑠」は「1. 発心の勧め」「2. 業報転鑠」の2項により構成される。鈴木正三は〈人間の仏教的再把握〉に正面から対処した人で、寛文元年に弟子雲歩が原形を板行した本書は、『心学五倫書』や『恨の介』の課題であった因果の問題に應えるものであった。寛永初期の正三は因果や病気を怨霊の仕業とし、その鎮魂を以て民衆教化に当たっており、本書は、因果の道理が不思議な「靈化」として現れたことを収録した実録集である。雲歩は序文で、現在の「一念」が現世の苦楽や順調と逆境、後世の成仏と墮獄、永劫の苦界の輪廻等を起すといい、現在の一念こそが過去の業報を断切り、未来を決定するとしていて、過去の因果からの脱却を、一念のあり方、即ち心のあり方により実現しようとしているとみる。そして、問題を自己の心のあり方に求めていく思惟に、注目すべきであると

している。

第二節『二人比丘尼』の無常と心」は、「1. 縁起的無常観の提示」「2. 無常観の深化」「3. 縁起的無常観と唯心論の主体性」「4. 縁起の人間観と唯心論の人間観」の4項から成る。寛永9年著の本書は、同じく正三が女性一般を教化の対象にしたもので、『薄雪物語』や『露殿物語』の無常と「煩惱即菩提」の問題に答えるものでもあった。物語の構成は、下野国の須田弥兵衛の妻が夫討死の跡を旅し、煩惱の身、女身を先世因果のわが科とうけとめ、夫討死の地で多くの骸骨と遊び、人間は四大元素の〈かり物＝縁起的存在〉で、それに執着するのが迷いの始りと知り、更に遍歴してある女房と共に菩提を求めるが、その女房も死に、更に旅して山中で老比丘に出会い、心外無別法、三界唯一心を教わる、というものである。本書は無常観を基調として仏道へ誘うもので、情緒的詠嘆的無常感に代り体験的現実的無常観が要請され始め、無常〈感〉から無常〈観〉へと展開するという。民衆の内から展開してきた〈仏教の人間化〉が無常観をめぐって虚無を生みかけたとき、正三は人間は四大の「かり物」という縁起的人間観を基調として、唯心論の主体性論で無常に対応する人間の〈自律〉を主張したと説く。こうして現世を人間の世界として〈人間の仏教的再把握〉をしたが、それは仏教教化により幕藩制国家を支える民衆の主体性を引出すことをめざし始めると共に、また幕藩制国家イデオロギーとしての有効性をもつことになったと解釈した。

第三節『念仏草紙』の唯心弥陀と世法即仏法」は、「1. 唯心弥陀説」「2. 現世への関心」「3. 民衆思想への対応」の3項から成る。正三が前著と同年の寛永9年に著わした本書は、2人の僧尼の問答形式の仮名法語に近い形のもので、『七人比丘尼』の「煩惱即菩提」と「空」や「心外無別法」の問題に対応するものでもあった。本書では唯心弥陀説が集中的に説かれ、「心こそころまどはすこころなれ、こころに心こころゆるすな」と自からの心を制禦し、何ごともし忘れて念仏すれば心の弥陀が現われ、「うき世」の現世も心が仏になることで仏法となり、「世間即仏法」として現世の福楽が肯定されるとされている。ここでは、「煩惱即菩提」や虚無の影や虚構化の問題は、正三のこの〈人間の仏教的再把握〉による唯心論の主体性思想で否定されることとなったという。正三は「世間即仏法」から農・工・商の職分がそのまま仏行とする職分仏行説を展開するが、結局それは、世法の幕藩制国家体制が仏法となり、仏教が体制イデオロギーとなることを積極的に推

進することとなり、その〈人間の仏教的再把握〉は体制的近世仏教の先駆の役を果たし、と位置づけた。

第四章「経験的合理主義と仏教—仮名草子と儒仏論争—」は3節から構成され、第一節『『清水物語』の研究状況と課題』は、「1. 朝山意林庵」「2. 排仏論・三教一致論説と経験的合理主義・現実主義」「3. 朱子学の合理主義説の課題」「4. 二重構造と時代への位置づけ」の4項から成る。本節では、寛永15年刊行の本書の著者朝山意林庵の朱子学やその経歴に触れ、かつ本書に関する従来の諸研究を紹介しつつ、本書が朱子学と合理主義と神儒仏の三教一致の思惟の内的関連性を検討すべき課題をもつことや、本書のいう「道理」の問題への留意、幕藩制イデオロギー形成の流れでの本書の位置、などが研究対象となることを指摘している。

第二節『『清水物語』の道理』は、「1. 権威への懐疑状況」「2. 学文論」「3. 経験的合理主義と新しい人間像」「4. 排仏論をめぐる」「5. 経験的合理主義と心の主体性」の5項から成る。本書では、〈あるべきことがあるべきようになりえていない〉現実が問題とされ、それは権威への懐疑状況によるとし、それを正す原理としての「道理」と、そのための「学文」を勧める。その「道理」は、水が底きにつく如き経験的客観的自然法則で、経験的合理主義の性格をもつが、同時にそれは「天道」とされ、万物・人間に内在する個有の法則性で、子に親が、奉公に主君が「天道」とされるような社会的秩序でもあった。この社会的秩序を「道理」とすることから、三綱五常を否定するとして排仏論を説くが、しかし三綱五常を守れば来世も安穏として、後世や三世輪廻が前提とされ、逆に仏教的思惟の枠内にあることを露呈するという、本書の「道理」は、経験的客観的自然法則であり乍ら、人間に内在する主体的原理ともされ、本書の経験的合理主義も、唯心論的主体性論の一にすぎないことを示すと、説明している。

第三節『『祇園物語』の「深き理」』は、「1. 「深き理」の意味」「2. 唯心論的合理主義と現世肯定」「3. 三教一致論の成立」の3項から成る。本書は、寛永15年刊行の先の『清水物語』に批評を加えたもので、同時期の刊行であり、「深き理」を「根本理念」にする。「深き理」は、仏教や非経験的な不可知な原理で、八卦の如く儒教でもあり、〈あるべきことがあるべきようになりえていない〉現実では、「目前の理」だけでは合理的でなく、不合理なこの「深き理」が却って合理的であったという。これは現実の不合理に対処す

るため生れたもので、寛永期の民衆の思惟に基盤をもつ唯心論的合理主義であり、現世を肯定し、その三綱五常の社会的規範をそのまま認めたとする。「深き理」は心に内在することで原理と心の一体説であり、従って思惟の様式では儒道仏の三教一致論を説き、また神仏一致も認めた。その唯心論的合理主義は、〈心の主体性〉思想として民衆の〈自律〉の拠点をめざし乍ら、三教一致論を生んで支配イデオロギーへ接近し、支配の基盤を提供してしまつた、としている。

最後の結章「日本近世における自律の特質」は、「1. 東アジアのなかで」「2. 因果観念をめぐって」「3. 仏教の人間化と人間の仏教的再把握」の3項から成る。結章では、以上の記述を総括して、「思ふ事叶はねばこそ憂世なれ」から出発して〈心の主体性〉に帰結した展開は、中国の陽明学の主体性論にも通じ、近世民衆思想史を貫くものであり、東アジアの「前近代」思想史は唯心論的主体性思想が中核で、ここから東アジアの近代が考えられねばならないとする。そして、その内での日本近世の民衆思想は固有の特質を形成したとして、因果の内での〈心の主体性〉による〈自律〉や、恋を人の問題とすることからの煩惱と菩提をめぐる〈仏教の人間化〉と、そこに生れた虚無と享楽を越えるための〈人間の仏教的再把握〉、その原理としての縁起的無常観と唯心弥陀説や、その現実観としての〈世法即仏法〉論などを、改めて指摘する。そして、これらは、戦国期民衆の〈自力救済〉からの解放要求と、これに代わる統一政権の民衆解放とその幻想化に基づくもので、民衆は権威を内在化しようとしたが、仏教「教団」は不在で神仏は超越性を失い、自から「心神」観念の形成へむかい、唯心論的主体性思想も民衆の〈自律〉要求に応えた心に権威をもつ人間を誕生できずに終った、と結んでいる。

〔審査結果の要旨〕

以上が提出された主論文の概要である。本論文の意図するところは、戦国期の過酷な苦難のなかで、〈自力救済〉に苦闘した民衆が、近世初期の統一国家権力の形成、支配の過程で、いかにその〈自律〉を確立しようとしたかということ、を、史料的に克明に追究しようとするものであった。そのため、直接的な関係史料の殆んど見出しえない同時期にあって、新たに、従来、国文学の分野で主として中世のお伽草子から近世の井原西鶴以後の浮世草子に至る間の過渡的作品とされてきた仮名草子を中心にとりあげ、それを歴史的

史料として再考察することで、所期の目的を達しようとした。本論で取上げられた仮名草子類は約10点に及ぶが、著者はこれらの知識人層による作品群に、作者が民衆に向けて語り、一定程度民衆が受容したものを作者が代弁する、民衆思想が見出せるものと理解した。

このため著者は、各作品に関する従来の研究業績を詳細に検討し、それを批判的に継承しつつ、独自の考察を加え、それを改めて歴史学的、思想史的視点から歴史史料として活用することを試みたのである。この史料操作、策定は著者の独自の方法論に基づくものであり、画期的な性格をもつものとして注目し、大きな成果を収めたことを認めなければならない。

とくに、各作品の構成する思想内容を徹底して分析し、それぞれの思想史的推移を読みとり、その過程で、民衆が新しい近世的支配権力のなかで、支配されてゆきつつ生存するための〈自律〉を構築してゆく姿を、歴史の表面に浮び上がらせた功績は、従来の同時期の思想史の欠落部分を明らかにするものとして、高く評価されねばならない。

さらに著者は、その〈自律〉の性格を、近世東アジア共通の性格と位置づけ、それが日本ないし東アジアの近代を規定するものと指摘したことは、今日の近代史考察の上にも大きな示唆を提供するものとして、注目したい。

しかし、本論にもなお求むべき点がないわけではない。例えば、「煩悩即菩提」に関する各作品の差異の説明などは、その表現されるニュアンスの理解に、煩鎖の感を免れえない点などである。また、主題をよりよく読者に訴えるためには、近世初期の歴史的、時代的性格の説明や、同時期の民衆層の構成やその思惟に関する概観など、一般的、総体的考察を用意する要もあったかとおもわれる。その他、本論中の執筆内容に、微細な点で疑義を覚える箇所が無いわけではない。

とはいえ、以上の批評を加えた事項は、本研究に対する望蜀の類に属するもので、決して全体の研究成果を損うほどのものではない。著者が本研究によって、独自の方法論を駆使し、近世初期民衆思想史の不明確な分野に大きな光を当てた効績は、大変高い意義をもつものである。

また主論文に添付された参考論文『日本近世の思想と仏教』（平成元年刊）は、第一編「戦国宗教思想論」、第二編「藤原惺窩論」、第三編「幕藩制仏教思想論」から構成される450頁に及ぶ大著で、著者の主論文作成に至る過程の課題や研究成果を示すものであり、主論文の評価を充分支えるに足る業績

といえる。以上の審査によって、本論文が文学博士の学位に充分価することを認めるものである。

〔最終試験及び語学試験〕

なお、審査員全員により、提出論文を中心として、これに関連する諸事項および所定の語学に関する試問を行った結果、すべて、大学院文学研究科博士課程修了者と同等以上の学力を有することが確認されたことを、併せて報告する。